

リタイア期の夫婦関係とパーソナル・ネットワーク ——都市度による検討

立山 徳子

(関東学院大学人間共生学部 教授)

本稿ではリタイア期の夫婦関係とパーソナル・ネットワークとの関連を、特に都市度に注目して分析・考察した。

その結果、夫婦間ネットワーク共有と世帯外ネットワークの関連について、「妻主導型(都心)」、「夫主導型(郊外)」、「妻の夫方親族参加にともなう親族・近隣・友人の重層的社交圏(村落)」が確認できた。総じて夫婦間ネットワーク共有には、「土着性による関係形成」(村落)と「性別役割規範から派生した関係形成」(都心・郊外)という社会環境要因による差異が認められる。

また妻のネットワークのあり方が夫婦間ネットワーク共有を左右する構図が認められ、妻がネットワークの「ゲート・キーパー」的役割であることも確認できた。

1. 問題関心

わが国における高齢者(65歳以上)人口の推移は年々増加傾向にあり、平成27(2015)年11月時点では全人口のうち26.7%を占めるに至っている¹⁾。とりわけ1947年から1949年生まれのいわゆる、団塊世代が退職年齢を迎えた昨今、リタイア後の「第二の人生」設計は社会的にも注目される意義があるだろう。子どもが独立する“空の巣期”や職業生活からの“リタイア期”というライフステージの移行は、人々を再び夫婦関係へと回帰させるのだろうか。

一方、夫婦にはそれぞれ、リタイアに至るまでの長期間にわたり形成されてきた“おつきあい”、言い換えれば、世帯外ネットワークというものも蓄積されている。リタイア後の生活空間が職場から地域社会へと移行してゆく中で、夫・妻それぞれのパーソナル・ネットワークは夫婦関係のあり方とどのような関係をもつのだろうか。本稿ではこの点をパーソナル・ネットワーク研究の視点か

ら“リタイア期の夫婦関係と世帯外ネットワークの再編”にとらえ、第二の人生へのソフト・ランディングのあり方を考察してゆく。

2. 夫婦関係と世帯外ネットワーク

(1) リタイア期夫婦の「家族・コミュニティ問題」

人はどういった人々に囲まれ、何を得ているのだろうか。パーソナル・ネットワーク研究は個人を中心とした個々の社会関係の実態を記述・分析することにより、今日の社会変動下における個人の生活問題処理のあり方や多様な社会環境におけるwell-being、社会的態度を明らかにしてきた。

なかでも家族と地域(都市)の二つの研究領域は、パーソナル・ネットワーク研究が多く貢献してきた分野である。前者の家族研究では、長らく家族を自明の集団として前提にした集団論的アプローチが支配的であったが、家族もまたネットワークの集合体としてとらえなおされることによ

り、その変容を記述するアプローチが登場している(野沢 1999; 立山 2011)。

一方、都市研究におけるコミュニティの議論では、一定の地理的範囲内での第一次関係の存続(コミュニティ存続論)、または逆にその喪失(コミュニティ喪失論)を検証してきた。だがその後、一定の地理的範囲を超えたパーソナル・ネットワークの広がり確認され(コミュニティ解放論)、コミュニティの概念自体を問い直す「コミュニティ問題(Community Question)」という問題提起がされてきた(Wellman 1979=2006)。

こうした中、ネットワーク研究を応用した「家族・コミュニティ問題」(野沢 1995)の提唱がある。人々の生活問題処理のあり方をより忠実に観察・記述するならば、それは決して家族領域やコミュニティ領域のいずれか一方に限定されるものではないだろう。個人は必要に応じた関係形成やサポート資源の獲得を、家族内部そして外部の双方に展開し生活問題の処理を図っている。

「家族・コミュニティ問題」の問題提起は、個人にとってのネットワーク資源配置を“家族内部のネットワーク”と“家族外部のネットワーク”というふたつの分析対象に整理した上で、生活問題処理のあり方が家族領域とコミュニティ領域との相互関連の中で議論され得る地平を拓いた意義をもつ。

こうした視点をリタイア期夫婦にあてはめるとき、分析対象は①世帯内における夫婦関係と②世帯外におけるネットワークの2つに整理できる。とりわけ、リタイア期を経つつある夫婦にとって、世帯外ネットワークのあり方は「職場から地域社会へ」または「夫婦それぞれから“夫婦ともども”へ」と大きく移行する時期にあることが想像される。そこでこうした移行期にあるリタイア期夫婦が直面する夫婦関係とネットワークの関係を焦点化する意義があるだろう。

(2) 夫婦役割関係と社会的ネットワーク

ところで夫婦関係と世帯外ネットワークとの関連を扱ったものにボット(E. Bott)の研究がある。ボットは特に夫婦の役割関係に注目し、これに2つのパターンがあること、さらにはそのパターン

が外的な社会環境であるネットワークによって影響を受けていると解釈した(Bott 1955=2006)。

ここでボットは夫婦役割関係を役割の「分離度」という視点から論じた。役割の分離度とは、夫婦間での役割が別々で交わらないか、それとも両者の間で頻繁に交換や協力がなされるのかに注目した概念である。これにより夫婦役割関係は、役割間の〈分離—融合〉の軸上で論じられることになる。そしてボットは①分離的夫婦役割関係(夫と妻との間でそれぞれの仕事や余暇の過ごし方までが明確に分けられているような夫婦役割関係)と②合同的夫婦役割関係(何事につけても夫と妻とが話し合い、家庭内の事柄を交替で行い、余暇も一緒に過ごそうとする夫婦役割関係)の2つの異なるパターンを見いだした。

さらにボットは夫婦が世帯外にもつネットワークがもっとも夫婦役割関係の分離度に影響すると考えた。そして夫婦を取り巻く世帯外ネットワークが夫婦役割関係を規定する「拘束としてのネットワーク」にもなれば、夫婦にサポートを提供する「資源としてのネットワーク」でもあると考えた。

ボットの研究は夫婦関係が夫婦の保有するネットワークと関連することを示した。

(3) 夫婦間サポートと世帯外ネットワーク・サポート

一方、数あるボット説の再検証の中でもウェルマン夫妻は、社会的サポートの点から2つの仮説が成り立つと考えた。そのひとつは、夫婦が夫婦間または世帯外ネットワークからサポートを受ける場合、どちらか一方のサポートが低調になり両者の関係は競合的である(competitive)というもの(競合説)、そしていまひとつは夫婦間サポートと世帯外ネットワークからのサポートは、むしろ両立している(complementary)というものである(両立説)(Wellman and Wellman 1992)。

そこでウェルマン夫妻は20組の夫婦インタビュー調査から次の2点の結論を得た。第一に、ボットが考えたような世帯外ネットワークが夫婦役割関係を決定するのではなく、むしろ夫婦役割関係が先にあり、夫婦が世帯外ネットワークを選択しているという点である(夫婦選択説)²⁾。第二

図表-1 記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	分散
夫・趣味同伴頻度	322	1	4	2.38	1.017	1.034
夫・近隣づきあい同伴頻度	326	1	4	2.54	.910	.828
夫・親族づきあい同伴頻度	327	1	4	3.12	.772	.596
夫・友人づきあい同伴頻度	327	1	4	2.54	.902	.813
妻・趣味同伴頻度	323	1	4	2.38	1.072	1.150
妻・近隣づきあい同伴頻度	324	1	4	2.48	.962	.925
妻・親族づきあい同伴頻度	324	1	4	3.19	.752	.566
妻・友人づきあい同伴頻度	326	1	4	2.44	.983	.967
夫・配偶者情緒サポート	328	3	12	9.94	1.791	3.207
妻・配偶者情緒サポート	325	3	12	9.47	2.199	4.837
都市度 (ダミー)	340	0	1	.40	.491	.241
夫学歴	331	1	2	1.49	.501	.251
妻学歴	333	1	2	1.41	.492	.242
夫最長職地位 (ダミー)	324	0	1	.76	.428	.183
妻最長職地位 (ダミー)	323	0	1	.17	.376	.142
夫婦の年収	332	1	4	2.22	1.044	1.090
夫の健康状態	331	1	4	2.02	.598	.357
妻の健康状態	332	1	4	2.02	.549	.302
夫親族量	296	0	12	5.37	3.651	13.333
夫近隣量	292	0	12	3.89	3.609	13.023
夫友人量	308	0	12	5.52	3.954	15.631
妻親族量	306	0	12	5.81	3.520	12.388
妻近隣量	307	0	12	4.40	3.318	11.011
妻友人量	314	0	12	5.74	3.300	10.889
近距離子の有無	340	0	1	.53	.500	.250
夫近距離親族の有無	296	0	1	.54	.499	.249
夫近距離友人の有無	307	0	1	.65	.477	.228
妻近距離親族の有無	298	0	1	.57	.495	.245
妻近距離友人の有無	304	0	1	.75	.432	.186
夫・別居子サポート	272	0	3	1.69	1.225	1.500
夫・親族サポート	272	0	3	1.25	1.141	1.303
夫・近隣サポート	272	0	3	.51	.842	.708
夫・友人サポート	276	0	3	1.37	.931	.867
妻・別居子サポート	279	0	3	1.92	1.219	1.486
妻・親族サポート	286	0	3	1.58	1.123	1.262
妻・近隣サポート	290	0	3	.88	.983	.967
妻・友人サポート	288	0	3	1.81	.771	.594

に世帯外ネットワークからのサポートは、相互支援的な夫婦役割関係と共存し、ボットが述べたような競合的關係ではないというものであった。

(4) 都市度という変数

ところでボットやウェルマン夫妻の研究はいずれも都市居住夫婦のインタビュー調査による結果であった。だが夫婦が置かれる外的条件として、地域社会という変数は無視しがたい。特に都市社会学の研究成果からは、社会階層や属性などの影響を取り除いてもなお、都市度³⁾の違いによりパーソナル・ネットワークの構造や空間分布の差異が認められ、都市度の高い地域(都心部)ほど保有するパーソナル・ネットワークの量は少なく、空間的に分散していることが報告されている(Wellman 1979; Fischer 1982; 立山 1998)。

またパーソナル・ネットワークの構造に注目した研究からは、より都市的な場所では友人などの選択的關係が多く、逆に村落などの非都市的な場所では近隣や親族などの非選択的關係がその比重を高めること、また都市度が高くなるほど家族・親族關係が家父長的なものから母方親族重視のものへと変化することなどが報告されている(Litwak 1960; Fischer 1982; 松本 2005)。このようにパーソナル・ネットワークのあり方を問うとき、都市度の影響は無視しえない。

以上の先行研究から、本研究ではリタイア期夫婦の夫婦關係(夫婦間ネットワーク共有)とパーソナル・ネットワークとの關係を以下の分析課題から検討する。第一に都市度(都心・郊外・村落)

図表-2 夫婦間のネットワーク共有

	夫・親族づきあい同伴頻度			妻・親族づきあい同伴頻度			夫・近隣づきあい同伴頻度		
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル1	モデル2	モデル3	モデル1	モデル2	モデル3
	β	β	β	β	β	β	β	β	β
都市度(ダミー)	.074	.022	-.009	-.028	-.097	-.123 +	.243 ***	.210 ***	.208 **
夫学歴	-.011	.000	-.027	-.129 +	-.066	-.070	.065	.050	.032
妻学歴	-.085	-.029	-.009	.087	.151 *	.183 **	-.064	.012	.071
夫最長職地位(ダミー)	.126 *	.059	.058	.175 **	.118 +	.106 +	.051	.018	.046
妻最長職地位(ダミー)	.121 *	.105 +	.098	.053	.047	.069	.007	-.068	-.110 +
夫婦の年収	-.023	-.084	-.088	-.009	-.133 +	-.147 *	-.078	-.101	-.123 +
夫の健康状態	-.064	-.053	-.025	.047	.040	.032	-.104 +	-.053	-.043
妻の健康状態	.112 +	.127 *	.100	-.012	.035	.071	.048	.054	.055
夫親族量		.197 *	.178 *		.232 ***	.235 *		-.027	-.036
夫近隣量		.101	.081		-.040	-.079		.385 ***	.409 ***
夫友人量		-.018	-.030		-.033	-.005		.067	.048
妻親族量		.384 ***	.361 ***		.324 ***	.306 ***		.184 *	.147 +
妻近隣量		-.165 *	-.155 +		-.112	-.126		.135 +	.125
妻友人量		.051	.096		.061	.075		-.025	-.011
近距離子の有無			-.105 +			.050			-.014
夫近距離親族の有無			.101			.077			-.017
夫近距離友人の有無			-.084			-.064			.022
妻近距離親族の有無			.078			.081			.094
妻近距離友人の有無			-.003			.014			.032
R二乗値	.057	.306	.359	.052	.245	.282	.081	.392	.415
調整済みR二乗値	.031	.262	.297	.026	.197	.212	.056	.353	.357
F値	2.201 *	6.881 ***	5.777 ***	1.998 *	5.037 ***	4.022 ***	3.190 **	9.962 ***	7.232 ***
N	298	233	216	298	232	215	297	231	214

注: 1) 表中の+は10%水準、*は5%水準、**は1%水準、***は0.1%水準の有意差を表す
 2) 独立変数の共線性診断: VIFはすべて3.0以下であった

の違いによって夫婦間ネットワーク共有とパーソナル・ネットワークとの関連に差異がみられるのか。第二に都市度の違いによって夫婦間サポートと世帯外ネットワーク・サポートとの間に競合・両立のどちらの関係があるのか。以上の2つの課題を確認していく。

3. 分析の方法

(1) 調査データの概要

本研究で用いるデータは文部科学省科学研究助成金(2011~14年度)基盤研究(C)を得て行われた「都市度別にみたりタイア期夫婦の夫婦役割関係とパーソナル・ネットワークに関する研究」(研究代表:立山徳子)によるものである。

調査は2012年10月に実施された。調査対象者は2012年7月時点において、夫の年齢が61歳から68歳に該当する夫婦とした。調査対象地区は都市

度を反映するよう、都心地区(東京都中野区・台東区)、郊外地区(神奈川県磯子区・戸塚区)、村落地区(千葉県館山市・勝浦市・鴨川市・大網白里町(当時。現:大網白里市)とした。

サンプリングは選挙管理人名簿による等間隔抽出法を用いた。ただし選挙管理人名簿には「夫」「妻」などの続柄が記載されていないため、夫婦の抽出に際し、①同一世帯に居住し、②同一姓を名乗り、③夫婦として常識的な年齢差のある男女を選択する作業を行った⁴⁾。サンプル数は3地区それぞれに750組の夫婦(夫750人、妻750人)の合計2,250組の夫婦とした。

調査は郵送・自記式ののち返信回収という方法により行われた。この結果得られた有効回収票は夫340票、妻339票、また夫婦両方の回答があった夫婦票は335組(670票)で、有効回収率は14.9%であった。本研究の分析にはこの夫婦票を用いる。

妻・近隣つきあい同伴頻度			夫・友人つきあい同伴頻度			妻・友人つきあい同伴頻度		
モデル1	モデル2	モデル3	モデル1	モデル2	モデル3	モデル1	モデル2	モデル3
β	β	β	β	β	β	β	β	β
0.13 *	.099	.080	.100	.156 *	.168 *	.066	.127 +	.142 *
-0	-.050	-.037	-.018	-.091	-.082	-.020	-.080	-.087
-0	.013	.028	-.139 *	-.089	-.068	-.064	-.003	-.010
0.09	.078	.085	-.113 +	-.075	-.058	-.018	.010	-.002
0.05	.005	.001	.058	.071	.069	-.004	-.041	-.039
-0.1	-.073	-.091	.032	.067	.046	.047	-.014	-.018
-0	.082	.066	-.141 *	-.115 +	-.109	-.079	.006	.042
0.05	.059	.045	-.093	.011	-.012	-.085	-.054	-.089
	-.009	-.016		-.061	-.058		.059	.057
	.195 *	.212 *		.125	.116		-.042	-.029
	.028	-.007		.275 ***	.260 **		.279 ***	.277 ***
	.106	.074		.147 +	.149		.091	.072
	.284 ***	.279 ***		-.071	-.090		.095	.087
	.072	.059		.073	.085		.180 *	.211 **
		-.005			-.011			-.085
		.050			.031			.104
		.039			.065			-.022
		.062			-.079			-.200 *
		-.028			.055			.051
.051	.304	.312	.081	.225	.221	.027	.228	.258
.025	.260	.246	.055	.175	.145	.000	.179	.186
1.944 +	6.833 ***	4.702 ***	3.172 **	4.491 ***	2.915 ***	1.007 n.s.	4.619 ***	3.605 ***
298	234	217	298	232	215	299	234	217

(2) 変数と分析手順

本研究では以下の変数を用いる。まず夫婦間ネットワーク共有を測るものとして、①趣味同伴頻度（4件法）⁵⁾と②つきあい同伴頻度（親族、近隣、友人）の2つを用いた⁶⁾。また夫婦間サポートとしてa. 悩み、b. 評価、c. 助言の頻度（4件法）⁷⁾を累積した配偶者情緒サポートを用いる。都市度は村落を1、それ以外を0とするダミー変数を設定した。属性は、学歴（夫・妻）、最長職地位（夫・妻）、夫婦の年収、健康状態（夫・妻）を用意した。このうち最長職地位は正社員（20年以上）を1、それ以外⁸⁾を0とするダミー変数を用いた。ネットワーク変数については①親族・近隣・友人のネットワーク量⁹⁾、②近距離ネットワーク有無¹⁰⁾、③近距離子の有無¹¹⁾、④ネットワーク・サポート¹²⁾をそれぞれ用意した。各変数の記述統計は図表-1に示すとおりである。

分析手順については、まず趣味同伴頻度とつき

あい同伴頻度のそれぞれに対し、都市度、属性、夫婦の世帯外ネットワーク量、近距離ネットワークの有無、近距離子の有無を重回帰分析にかけ説明力を検討する。この際、独立変数の投入方法は、①都市度、②属性、③ネットワーク量、④近距離ネットワークの有無の順に順次投入した。

また配偶者情緒サポートに対する都市度、属性、夫婦の世帯外ネットワーク量とネットワーク・サポート、近距離ネットワークの有無を重回帰分析にかけ、夫婦と世帯外ネットワークとのサポート間に競合・両立どちらの関係があるのかを確認してゆく。

4. 分析結果

(1) 夫婦間ネットワーク共有と世帯外ネットワーク

夫婦間ネットワーク共有は夫婦のもつ外的条件とどのような関連をもつのか。そこでまず趣味同伴頻

図表-3 都市度別にみた夫婦間のネットワーク共有

	夫・近隣づきあい同伴 頻度			夫・友人づきあい同伴 頻度			妻・親族づきあい同伴 頻度			妻・友人づきあい同伴 頻度		
	都心	郊外	村落	都心	郊外	村落	都心	郊外	村落	都心	郊外	村落
	β	β	β	β	β	β	β	β	β	β	β	β
夫学歴	.026	-.118	.098	-.249+	-.165	-.073	.130	-.258*	-.133	-.102	-.184	-.015
妻学歴	.280+	.186	-.047	.098	.160	-.249*	.240	.330**	.065	-.041	.048	-.046
夫最長職地位(ダミー)	.063	.013	.077	-.213	-.034	.041	.020	-.057	.214+	.007	.064	.021
妻最長職地位(ダミー)	-.223	-.116	-.084	-.210	.044	.116	.161	.161	-.033	-.092	.113	-.071
夫婦の年収	.032	-.209	-.095	.246+	-.096	.089	-.216	-.338**	.208+	-.003	-.161	.068
夫の健康状態	.002	.030	-.010	-.011	.066	-.161	.027	.248*	.009	-.053	.014	.124
妻の健康状態	.038	-.060	.126	.042	-.086	-.036	-.039	-.033	.161	.045	-.224+	-.090
夫親族量	.211	-.102	-.111	.095	-.030	-.128	.503*	.379*	.031	.265	-.015	.063
夫近隣量	.229	.567***	.497**	-.296	.313	.402*	-.314	.042	.181	-.318	-.039	.099
夫友人量	-.080	.029	.056	.296+	.274+	.178	-.204	-.029	.051	.067	.306*	.253+
妻親族量	-.392**	.271	.359*	-.291	.212	.392**	-.032	.243	.517***	-.100	.086	.320**
妻近隣量	.551**	-.017	-.052	.358+	-.300	-.284+	-.132	-.188	-.276+	.260	.085	-.104
妻友人量	.118	.023	-.067	.136	.137	-.025	.360	.133	.065	.532*	.141	.045
近距離子の有無	-.072	-.006	-.004	-.099	-.133	.119	.194	-.130	.215+	-.090	-.214+	.019
夫近距離親族の有無	-.125	-.104	.072	.157	-.172	.156	.250	.055	.034	.127	-.122	.354*
夫近距離友人の有無	.111	-.073	.020	.115	-.059	-.004	.007	.022	-.268+	.158	.020	-.247+
妻近距離親族の有無	.118	.118	-.090	-.070	.021	-.363*	.014	-.054	-.012	-.209	.112	-.531***
妻近距離友人の有無	-.132	.079	.127	.152	-.072	.124	-.107	.193	.092	-.100	-.114	.202+
R二乗値	.532	.526	.382	.532	.945	.391	.425	.557	.362	.442	.375	.334
調整済みR二乗値	.305	.355	.223	.304	.254	.236	.145	.401	.198	.171	.155	.168
F値	2.340*	3.080***	2.404**	2.333*	-.015n.s.	2.529**	1.518n.s.	3.564***	2.209**	1.631n.s.	1.701+	2.010*
N	56	69	89	56	69	90	56	70	89	56	70	91

注: 1) 表中の+は10%水準、*は5%水準、**は1%水準、***は0.1%水準の有意差を表す
 2) 独立変数の共線性診断: VIFはすべて4.0以下であった

度を従属変数とし、都市度、属性、夫・妻のネットワーク量、夫・妻の近距離ネットワークの有無を独立変数として順次投入する重回帰分析を試みた。結果は夫から見た趣味同伴頻度のみ、都市度、属性、ネットワーク量を投入した段階で唯一、有意差が確認された(図表省略)。

だが都市度の説明効果は見られず、属性をコントロールしたのちに唯一、夫の友人ネットワーク量と(夫にとって妻との)趣味同伴が正の相関関係になることが認められた。一方、妻から見た(夫との)趣味同伴頻度はいずれの変数投入段階でも全く有意な効果は認められなかった。

そこで次につきあい同伴頻度を従属変数とし、同様の独立変数を順次投入するモデルで検討してみた。結果は図表-2のとおりである。親族、近隣、友人のいずれの同伴頻度の場合もモデル2ないしモデル3で有意な説明力を確認できた。調整済みR二乗値の大きさでみるかぎり、おおむねモデル

3が最も高い説明力を示すケースが多い。このことから、つきあい同伴頻度には、ネットワーク保有量ならびに近距離ネットワークの有無の効果が認められ、特にネットワーク保有量の説明効果は高いことがわかる。

またいくつかの従属変数に対して都市度(ダミー)の説明力に有意差が認められた。特に夫の近隣ネットワーク、夫ならびに妻の友人ネットワークのつきあい同伴頻度についてはモデルを変えても都市度の効果に有意差が認められる。逆に妻の近隣ネットワークのつきあい同伴頻度の場合、モデル1の段階で都市度の効果があるように見えたが、その後モデル2、モデル3と投入変数を増やすにしたがい、都市度の説明効果は失われる。妻の近隣づきあい同伴頻度は都市度ではなく、都市度によって異なるネットワーク保有量との関連によるものと言えよう。

(2) 都市度別に見た夫婦間ネットワーク共有

そこで以下では、都市度別に検討していこう。先の図表-2のモデル3の段階で都市度に有意な説明効果が認められた妻の親族ネットワーク、夫の近隣ネットワーク、夫ならびに妻の友人ネットワークのつきあい同伴頻度を従属変数とし、属性、夫・妻のネットワーク保有量、近距離ネットワークの有無を独立変数としたモデルを都心、郊外、村落のそれぞれについて検討していく。図表-3がその結果である。

(a) 夫の近隣ネットワーク共有

まず夫から見た妻との近隣つきあい同伴頻度については、都心、郊外、村落のすべてでモデルの適合が認められた。これによると①基本的に夫の近隣量が多いほど、妻との近隣ネットワークが共有されるという正の相関関係が郊外と村落に見られる。

だが他の変数の説明力に注目すると、都市度により近隣つきあい頻度と関連するネットワーク構造が異なることに気づく。たとえば、②都心夫の場合、妻の近隣量と正相関の一方で、妻の親族量とは負相関である。ここから都心夫婦の場合、親族ネットワークからは独立した、または相反する近隣ネットワークを豊富にもつ妻がいる場合、都心夫は妻との間で近隣ネットワークを共有していると言える。このことは夫の近隣ネットワークではなく、妻の近隣ネットワークに統合された夫婦間での近隣共有を意味しよう。

一方、③郊外や村落の夫たちの場合、夫の近隣量の多さが妻との近隣つきあい同伴頻度に繋がるという夫主導型の近隣ネットワークの共有である。特に村落夫の場合、夫の近隣量と妻の親族量は共に近隣つきあい同伴頻度と共鳴している。親族・近隣量が村落夫婦間の近隣共有と親和的なものと言える。

(b) 夫の友人ネットワーク共有

次に夫の友人つきあい同伴頻度については、都心と村落のみモデルの適合が認められた。都心と村落について詳しくみると、④夫に友人量が多い

ほど妻との友人つきあい同伴が増すという正相関関係が認められる(10%有意:都心)。ただここでも他のネットワーク保有量との同方向の相関関係が確認される。

⑤都心夫の場合は、夫の友人保有量のみならず、妻の近隣量(10%有意)も夫婦間の夫友人ネットワーク共有に正相関を示す。だが村落夫の場合、夫本人の友人量と夫婦間での友人ネットワーク共有との関連は認められない。一方、夫の近隣量(5%有意、+)、妻の親族量(1%有意、+)、妻の近隣量(10%有意、-)、妻の近距離親族の有無(5%有意、-)等、複数の変数と夫婦間での友人ネットワークの共有が相関関係にある。⑥村落夫の友人ネットワーク共有は夫近隣量、妻親族量(ただし近距離親族ではない)と共鳴するネットワークの中で展開されている。

(c) 妻の親族ネットワーク共有

妻の親族つきあい同伴頻度の場合、モデルの適応が認められたのは郊外と村落だけだった。このうち郊外妻の親族つきあい同伴頻度は夫婦のもつ属性によってその多くは説明されてしまい、ネットワーク要因による説明力はわずかに夫の親族量(5%有意、+)のみである。つまり、⑦郊外妻の場合、夫の親族保有量が多ければ、妻との間で親族ネットワークが共有される傾向にある。

それに対して村落妻の親族共有をめぐる構造は郊外妻のそれとは全く性質が異なる。⑧郊外妻に比べて村落妻の場合は夫婦の属性による説明力よりもはるかに夫婦の持つネットワーク状況により夫婦間での親族つきあい同伴頻度が説明される構造にある。有意な変数を確認すると、妻の親族量(0.1%有意、+)、妻の近隣量(10%有意、-)、近距離子の有無(10%有意、+)、夫近距離友人の有無(10%有意、-)が挙げられる。ここから村落妻の親族共有は妻自身が親族ネットワークに積極的に関与し、また子どもが近居で、なおかつ夫が近距離友人に取り込まれていない環境で夫婦間での親族ネットワーク共有が高まると言える。この点では、先に見た夫の友人共有に妻近距離親族の有無が負の相関関係にあった点と対と言える。

(d) 妻の友人ネットワーク共有

妻の友人づきあい同伴頻度については、郊外と村落で有意なモデルの適合が認められた。いずれの場合も妻の友人量そのものは有意な説明効果を示さなかった。まず⑨郊外妻の場合には夫の友人量が多く（5%有意、+）、また近距離子がいない（10%有意、-）場合に夫婦間での友人共有が見られる。

これに対し村落妻では⑩ここでも極めて高い妻の親族量の説明効果が認められる（1%有意、+）が、その妻の親族は近距離にないことも大きな説明力を示している（0.1%有意、-）。一方、夫の近距離親族がいることが妻の友人づきあい同伴頻度と結びついていることから（5%有意、+）、夫方親族への関与と夫婦間での友人共有が親和的な状況にある。

ここまで、都市度別につきあい同伴頻度による夫婦間のネットワーク共有のあり方を確認してきた。ここから以下のことが整理できるだろう。まず都心夫婦の場合、夫の近隣および友人ネットワークの夫婦間共有のみがモデル適合しているが、いずれの場合にも妻の近隣量が夫のネットワーク共有に影響するという構造になっていた（②⑤）。こうしたことは都心夫婦のネットワーク共有のあり方に妻がゲート・キーパーとして関わっていることを示すものだろう。

一方、郊外夫婦の場合、夫婦間ネットワーク共有を左右する変数は常に夫のネットワーク量であるのが特徴だ（③⑦⑨）。しかも共有するネットワークが夫のものでも、妻のものでもこうした傾向が読み取れる。このことは郊外夫婦にとって、夫のほう夫婦の社会関係のゲート・キーパーとなっていることを表しているだろう。

最後に村落夫婦の場合、夫・妻いずれのネットワーク共有においても、すべて妻の親族量の多少がかなりの説明力を示していた。ただしこの傾向は他のネットワーク変数の説明効果と併せて検討する必要があるようだ（③⑥⑧⑩）。村落夫婦のネットワーク共有には夫の近隣量や妻近距離親族の有無（-）なども影響している。ここから村落夫婦間のネットワーク共有には複数のネットワー

クの関連構造が存在すると言える。それは妻が妻方親族よりもむしろ夫方親族に関与する場合に、より鮮明に出現する夫方親族-近隣-友人の複数ネットワークが濃密に統合された村落夫婦の社交圏と言える。

5. 夫婦間サポートとネットワーク・サポート

最後に夫婦間サポートとネットワーク・サポートとの関連について確認してみよう。そこで配偶者情緒サポートに対する都市度、属性、夫婦それぞれのネットワーク量、さらに夫妻のネットワーク・サポートを独立変数として順次投入した重回帰分析にかけてみた。図表-4がその結果である。

結果は妻からみた夫の情緒サポートはいずれのモデルでも、全く有意な説明力を示さないというものだった。このことから妻からみた夫からの情緒サポートは本研究の扱う変数でみるかぎり、社会環境的なものによって規定されるものとは言いにくい。

一方、夫からみた妻の情緒サポートはいずれのモデルも有意差を確認できた。ただその説明力を比較するとモデル1が最も説明力が高く、ネットワーク量やネットワーク依存変数を投入したモデル（2～4）では説明力は落ちていく。

また都市度はいずれのモデルでも全く有意な説明効果を示さない。属性についてはいずれのモデルの場合でも一貫して、妻学歴と夫の健康状態が有意な説明力を示し、妻の学歴が低く、また夫の健康状態が優れないほど、夫は妻からの情緒サポートを得ている。

一方、ネットワークの効果は妻の友人量と妻の親族サポートの効果が確認できる。妻に友人が多く、妻の親族サポートが少ないほど、夫は妻から情緒サポートを得ている。

これらの結果から両立説・競合説のどちらが適応しているのだろう。強いて言えば、妻の親族サポートと夫への情緒サポートに負の相関がある点では競合説がやや優位だ。だが、これらの変数の説明効果は微細でもある。このことから夫婦間サポートとネットワーク・サポートの間に、競合説・

図表-4 夫・配偶者情緒サポート×ネットワーク・サポート

	モデル1 β	モデル2 β	モデル3 β	モデル4 β
都市度(ダミー)	-.095	-.063	-.039	-.015
夫学歴	.125+	.111	.096	.058
妻学歴	-.232***	-.235***	-.148+	-.162+
夫最長職地位(ダミー)	-.044	.007	-.006	.002
妻最長職地位(ダミー)	.079	.053	.041	.026
夫婦の年収	.044	.020	-.044	-.083
夫の健康状態	-.141*	-.118+	-.167*	-.143+
妻の健康状態	.016	-.019	.067	.067
夫親族量		.126		.140
夫近隣量		-.139		-.112
夫友人量		.077		.105
妻親族量		-.136		-.120
妻近隣量		.014		.022
妻友人量		.184*		.236*
近距離子の有無		-.019		-.019
夫・別居子サポート			.107	.124
夫・親族サポート			-.015	-.012
夫・近隣サポート			-.136	-.167
夫・友人サポート			.200*	.144
妻・別居子サポート			-.044	-.059
妻・親族サポート			-.139+	-.156+
妻・近隣サポート			-.043	-.018
妻・友人サポート			.105	-.021
R二乗値	.083	.127	.121	.188
調整済みR二乗値	.058	.066	.045	.066
F値	3.288***	2.100*	1.581+	1.542+
N	299	233	200	177

注: 1) 表中の+は10%水準、*は5%水準、**は1%水準、***は0.1%水準の有意差を表す
2) 独立変数の共線性診断: VIF はすべて4.0以下であった

両立説のいずれか明確な関係を見いだすのは早計だろう。

6. 考察

本論では、リタイア期の夫婦関係とパーソナル・ネットワークの関連を、夫婦間ネットワーク共有ならびに夫婦間サポートについて検討してきた。その際、都市度による世帯外ネットワークの違いから考察してきた。だが検討された変数のうち、もっとも都市度との関連を見いだせたのは夫婦間ネットワーク共有と世帯外ネットワークの関連についてだった。概してそれは、「妻主導型(都心)」、「夫主導型(郊外)」、そして「妻の夫方親族参加による親族・近隣・友人の重層的社交圏(村落)」というものだった。こうした都市度による差異が

生まれる背景には二つの理由が考えられるだろう。

ひとつは夫婦の社会移動経験の差が夫婦間ネットワーク共有の差に繋がるというものである。都心や郊外に比べ、村落夫婦のネットワーク共有に重層的な社交圏が見られる点は、相対的に移動の少ない村落社会だからこそ見られる特徴だろう。そこではまさに親族・近隣・友人はみな地域社会の中でひとつにつながった社会関係の網の目を形成しているのだ。

一方、都市度によって異なる性別役割規範が夫婦間ネットワーク共有に影響している面も考えられる。とりわけ郊外のみならず夫主導型のネットワーク共有の特徴が見られた点は興味深い。郊外は都心や村落に比べ、専業主婦率が高いことが確認されており(立山 2004; 2005)、相対的に性別

役割規範が強い地域である。夫主導型のネットワーク共有もそうした性別役割規範から派生するものと考えられるのではないだろうか。

総じて、夫婦間ネットワーク共有には、①「土着性による関係形成」(村落)と②「性別役割規範から派生した関係形成」(都心・郊外)という異なる2つの社会環境要因による差異が認められると言えよう。

最後に都心や村落で見られた妻の世帯外ネットワークがもつ夫婦間ネットワーク共有への意味を考えておこう。ここに見られるのは夫婦が世帯外のネットワークを共有するか否かは妻次第という構図であり、妻がまさにネットワークの「ゲート・キーパー」役割を果たしていると言える。職業生活からのリタイア後、夫が家庭や地域には“居場所がない”、家庭でも“夫婦バラバラ”の状態に

なるか、あるいは“夫婦ともども”地域デビューするかは妻次第のようだ。リタイア期夫婦の第二の人生における関係形成は、とりわけ夫にとって地域社会のみならず、足元の夫婦関係の再構築を伴うものと言える。

注

- 1) 総務庁統計局「人口推計（平成28年4月報）」より。
- 2) ポット、ウェルマン夫妻の研究のもう一つの焦点である夫婦役割関係と世帯外ネットワークとの間の因果関係については、インタビュー調査からの考察による別稿に譲る。
- 3) ここでの都市度とは当該地域における接触可能な人口量の差異とする。具体的には調査対象自治体の人口規模に準ずるものとした。
- 4) 夫婦でない男女が抽出・回答されたのは、1組のきょうだいのみであった。
- 5) 「趣味の活動をする」についての夫婦で行動する頻度。
- 6) 親戚づきあい、近所づきあい、友人づきあいのそれぞれに対して、「ご夫婦が一緒に行うのはどの程度ありますか」の問いに対し、「よくある」「時々ある」「あまりない」「全くない」の4つから選択してもらった。
- 7) 「夫（妻）は、私の心配ごとや悩みを聞いてくれる」「夫（妻）は、私の能力や努力を評価してくれる」「夫（妻）は、私に助言やアドバイスをしてくれる」を尋ねた。
- 8) その他には正社員経験が20年未満の者のほか、パート・アルバイトなどの非常勤、自営業、無職が含まれる。
- 9) 「日頃から親しくしている」親族、近隣、友人の量をさす。
- 10) 「日頃から親しくしている方」のうち最も親しい方について1時間以内でアクセス可能な場合を近距離とした。
- 11) 子どものいずれかが「同居」「徒歩圏」に居住する場合を近距離子「有」とした。
- 12) 各ネットワークに対して「悩みの相談をする人」「一緒に出かける人」「看病や介護を頼む人」を尋ね、「いる」場合に1点として累積した得点をネットワーク・サポートとした。

文献

- 立山徳子, 1998, 「都市度と有配偶女性のパーソナル・ネットワーク」『人口問題研究』54 (3) : 20-38.
- , 2004, 「家族から見た東京圏」倉沢進・浅川達人編『新編 東京圏の社会地図1975-90』東京大学出版会, 73-98.
- , 2005, 「首都圏都市空間における「近代家族」の在り処——1970～2000年国勢調査データに見る家族変動」『季刊家計経済研究』66: 21-31.
- , 2008, 「都市度とネットワークから見た子育て」『クォーターリー生活福祉研究』65: 20-32.

- , 2010, 「都市度別にみた世帯内ネットワークと子育て——都心・郊外・村落間の比較検討」『家族社会学研究』22 (1) : 77-88.
- , 2011, 「都市空間の中の子育てネットワーク——「家族・コミュニティ問題」の視点から」『日本都市社会学学会年報』29: 93-109.
- 野沢慎司, 1995, 「パーソナル・ネットワークのなかの夫婦関係」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房, 175-233.
- , 1999, 「家族研究と社会的ネットワーク論」野々山久也・渡辺秀樹編『家族社会学入門』文化書房博文社, 162-191.
- , 2009, 『ネットワーク論に何ができるか——「家族・コミュニティ問題」を解く』勁草書房.
- 松本康, 2005a, 「居住地の都市度と親族関係」『家族社会学研究』16 (2) : 61-69.
- , 2005b, 「都市度と友人関係——大都市における社会的ネットワークの構造化」『社会学評論』56 (1) : 147-164.
- Bott, Elizabeth, 1955, “Urban Families: Conjugal Roles and Social Networks,” *Human Relations*, 8: 345-384. (= 2006, 野沢慎司訳「都市の家族——夫婦役割と社会的ネットワーク」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論』勁草書房, 35-91.)
- Fischer, C. S., 1982, *To Dwell Among Friends: Personal Networks in Town and City*. Chicago: University of Chicago Press. (= 2002, 松本康・前田尚子訳『友人のあいだで暮らす』未来社.)
- Litwak, E., 1960, “Geographic Mobility and Extended Family Cohesion,” *American Sociological Review*, 25: 385-394.
- Wellman, B., 1979, “The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers,” *American Journal of Sociology*, 84: 1201-1231. (= 2006, 野沢慎司・立山徳子訳「コミュニティ問題」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論』勁草書房, 159-200.)
- Wellman, Beverly and Barry Wellman, 1992, “Domestic Affairs and Network Relations,” *Journal of Social and Personal Relationships*, 9: 385-401.

(2016年2月17日掲載決定)

たてやま・のりこ 関東学院大学人間共生学部 教授。
 主な論文に「都市空間の中の子育てネットワーク——「家族・コミュニティ問題」の視点から」(『日本都市社会学学会年報』29, 2011)。都市社会学、家族社会学、パーソナル・ネットワーク論専攻。
 (tateyama@kanto-gakuin.ac.jp)